

会員の広場



恩師「内山正熊先生」の教え

細谷 昌平（東京）

私は、愛知県の知多半島の先端にある内海の出身です。自然豊かな片田舎で育ちましたが、なぜか慶應義塾大学に入学時より国際問題に関心を抱き、ゼミナールは国際政治・西洋外交史の内山ゼミに入れて頂きました。

内山先生（1918―2011）は英国の

ロンドン大学に留学された方で、まさに英国紳士でしたが、正義感の強い情熱家でもありました。定年退職（1983）までに、28期約650名のゼミの人材を育成されました。E・H・カーの『危機の二十年』、『平和の条件』等に出会ったのもこの頃です。

先生は大学の最終講義（1983）で、今後の日本外交にとって、「日中友好が一番大事だ」と力説されたと聞いております。

先生のご活躍の第二ステージはまさにその実践でした。そのきっかけは、戦争末期に留学していた周さん（青海省）からの「中国人の学べる日本語学校を作って欲しい」との一通の手紙でした。前進させたのが松阪大学への赴任でした。大学の近くの、三重県度会郡

大内山村に財団法人大内山塾を開塾出来ました。以来、15年間（1983―1998）に亘って、中国の留学生68名を招へいし、研修、育成されました。

先生も奥様やご家族も、支援の先生方、ゼミOBの皆様も必死の努力でした。先生は退職金、蔵書の他私財も大半投入されました。

現在、留学生68名は35〜50歳ですが全員元気で活躍をしています。大学教授や講師などは約30名、研究機関や政府機関で要職を務めている者は10数名、残りは、日中経済活動と文化交流のマネジメントの仕事に携わっているとのこと。

同窓会誌（2011、6）の中で、留学生は、次のように述べています。

「これからも我々は、大内山ファミリーの絆とご恩を大切に日々邁進していきます」。

内山ゼミOB会は留学生も参加し、今年も内山先生と縁のある講師による講演会とパーティーを開催しました。先生の奥様（92歳）ご家族も参加され、先生の偉業とご人徳を偲びました。

先述しましたように、先生は慶應義塾大学の最終講義で「今後の日本外交にとって日中友好が一番大事だ」と力説されました。それから30年余り、2015年になって日中関係は進展していきましょうか。本格的な首脳会談はなされていでしょうか。力と力の対決ではなく、友好・外交こそ重要と内山正熊先生は教えています。